

1 (説明文・安田正美「単位は進化する 究極の精度をめざして」)

単位がどのように生まれ、どのように共有化されていったのかを解説したものです。引用した部分では単位の性格から説き始め、それが定着していくまでのプロセスを述べています。

問一

「定性的理解」とは何かを理解し、その具体例を探す問題です。「定性的理解」については本文冒頭の1頁1行目に「心地よい、軟らかい、おいしい、いい匂いがするなど、そのものが持つ性質を把握する」ことだと述べられています。物の性質を把握することが「定性的理解」ということになります。

正解はイです。「じょうぶ」という、ものの性質が理解の中心になっていることから定性的理解ということになります。

そのほかの選択肢を見ると、アは「直線距離」、ウは「砂糖の量」、エは「時間」に焦点があてられており、これらはいずれも数値化するもので、定量的理解に当たります。

問二

傍線部の中に含まれる「この二つ」が何を指しているのかを考えます。直前にあるように「デジタルとアナログという二つの構造」がそれです。では「デジタル」とは何かと言えば、本文1頁上段10行目に「数を数えることで量を把握する」ことであると分かります。「アナログ」については12行目から始まる段落で述べられており、「何らかの基準をつくり、その基準をもとに…量を把握する方法」です。これらを組み合わせて定量的理解をするツールが単位という訳です。

問三

直後に「というニーズ」と続きますので空欄にはニーズの内容が入ります。ニーズとは注にあるように必要性のことです。よって、どのような必要性があるかを考えることになります。単位が生まれたいきさつに関しては1頁下段40行目から始まる段落に記述があります。単位はまずさまざまな「量を測りたいという人間の欲求」があつて、そこから生まれてきたとあります。6字という制限を鑑みて「量を測りたい」を正解にします。

問四

味の測定については1頁下段58行目から記されています。まだ「単位化されておらず、量としては曖昧なまま」なのが問題なのですから、味覚を出す物質を特定し、その量を科学的に測ることが必要になるわけです。

問五

「制度化」については別のところで述べられています。傍線部を含む1頁下段85行目から始まる段落では単位が人間の欲求に応じて生まれ、そして制度化されるとありますが、これと同じことが1頁下段40行目から始まる段落でも述べられています。そこには「人間の欲求がまずあり、測るきまりごととして単位が生まれ、標準化されていく」と述べられています。両段落は同じことを述べたものであると考えられますので、欲求の後に起きる「決まりごとをつくることや」「標準化すること」が「制度化」にあたると考えられます。これらをまとめて解答を作ります。

問六

記号で選択する問題です

Aはウ、Bはア、Cはイ、Dはエ、になります。

問七

小学校で習う漢字からの出題です。楷書で一画ずつはっきりと書かれていることが必要です。

問八

本文の内容に合うものをさがす問題です。正解はウです。

アは「人間の身体の部分を用いて数を数えたい」という限定がおかしいです。イは30行目に「それぞれの個性があります」と述べられており、「同じ基準によってできている」かどうかは問題文中からは分かりません。エは単位の生まれるきっかけを「個人的な欲望」と限定してしまっていることが誤りです。正解はウで19世紀の電気も、現代の味も量の概念がなく、単位もなかったことで共通しているといえます。

2 (物語文・知野みさき「鈴の神さま」)

懐古的情緒も伴う幻想的な小説です。この部分では真ん中で場面の時間が大きくさかのぼる構成になっており、登場人物の人間関係も激変します。それを読み取れるか否かがカギになります。

問一

「複雑」とは複数の異なった要素が入り混じっているものという意味と考えられます。ここでは村の子が慕われていたフミちゃんが結婚のために別の場所に行ってしまうという事実に対して起きた相反する感情です。4頁上段11行目に「喜びも寂しさもひとしおだった」とあるので、これを詳しく説明すると正解になります。「フミちゃんが嫁入りのために地元を離れることに対してお祝いしたい気持ちとさびしい気持ちが混ざり合った気持ち」などになります。

問二

「目をほそめる」の慣用句の意味の理解を踏まえた問題です。正解はイです。ここではほほえましい気持ちになっている感情表現ですからアの「不自然」、ウの「未熟」は間違いです。フミちゃんにとって美紀は友人のひ孫であり、フミちゃんのひ孫の仁美は4頁下段3行目に「若い女性」と描写されており、36行目の発言からも美紀とは年齢差があり、似ているという表現もありません。

問三

「金」にまつわる成句の知識を問いました。

正解は一がエ、二がオ、三がウ、四がア、五がイ、です。

問四

傍線部の主語は美鈴です。「ほっとした」というのは緊張が解けたときの感情を表現したものであり、解答では何に緊張し、それがどうして緩和したのかを説明する必要があります。ここでは直前の「様変わりした出店の中で練り飴屋は数少ない昔ながらの店のままで」あったことがこの感情の原因と考えられます。「様変わり」とは出店の様子が過去とは違うことであるという補足が必要です。これらを総合して解答を作成します。

問五

この小説の後半部分は突然美鈴の幼年時代に時間が遡ります。少女の初々しい感情が描かれているのが傍線部です。「忍び笑い」とは隠れて笑うことです。なぜ笑ったのかのかと言えば「袖や裾の紅葉（の模様）を見」たことが原因です。もちろん模様そのものというよりはめったに着ることがない気に入りの服だったからです。ここでの笑いは満足の感情を表していると考えられます。

これらをまとめて解答を作成します。

問六

「いい」には様々な意味があります。この文章ではくじの値段の三銭か五銭に対して、「いい値段」といい、その後5頁下段106行目「大枚をはたいて」（たくさんのお金を払って、という注がついています）と表現されています。つまり、この「いい」は「たくさん」という意味であることとなります。正解はウです。

アは「無駄」かどうかを述べている点、イは「許せる」かどうか、エは「適当」というのが異なり、正解はウの「安くはない」の意味です。

問七

言葉に関する選択問題です。

Aはイ、Bはア、Cはエ、Dはウです。

問八

本文に合う選択肢をさがす問題です。

正解はウです。

アは「みっちゃん」が久しぶりに出会ったのは一つ年上で姉として慕っていたフミちゃんです。「同級生」ではないのでこれは間違いです。イはかつて自分の幼いころのことを思い出したのは美鈴であり、美紀はそのひ孫です。エは子どもたちが少ないおこづかいをやりくりしているさまが書かれていますので「遠慮なく出店で買い物をすることが許された」とは言えません。正解はウで、仁美の気遣いは4頁下段36行目の「ええ。フミばあちゃんと、積もる話もありますでしょう？」という発言に見られます。